

---

# カミナリヤ

桜希 澪乃

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

カミナリヤ

### 【Nコード】

N1666C

### 【作者名】

桜希 澪乃

### 【あらすじ】

電車の中にいる迷惑な乗車客。いらいらしますよね。そんな迷惑なやつらにガツンと言ってやりたいけどできない。そんな人たちに読んでいただきたい？話です。

最近は「ストレス社会」と言われて久しい。  
なんでもかんでも「ストレス」を理由にして、まるでなにかの免  
罪符のようだ。

ストレス、と言えば聞こえがいいが、実際本当の意味でのストレ  
スを知り、ストレスで悩んでいる人間は少ないのではなからうか・  
・？

と、彼はふと思う。

\*

\*

\*

彼は電車を待っていた。

アナウンスとともに滑り込んできた電車は手ごろに空いていた。

乗り込んで、目の前の開いている席に座る。

ベビーカーから子供を抱きかかえる母親。

ふんぞり返って座っている金髪の男。

膝の上でノートパソコンを開いているサラリーマン。

けたたましく笑い声を上げる制服姿の女子高生。

車内の乗客は、だいたいそんな感じだった。

「うそー、マジい・・・それ、きもくね」

「キモイ」

優先席にどっかりと座り込み、大声を張り上げて話す女子高生が  
目に付く。

5人組の彼女等は、大声で話を続けながら、携帯をしきりにいじ  
るもの、カバンの中からポーチを取り出し化粧を始めるもの、菓子  
パンにかぶりつくもの、様々だ。

怒りが込み上げたが、彼はそれを深呼吸で押さえ込む。  
ピロリロ〜ラ〜ピロ〜リ〜ラ〜

「あ？ 俺。なに？ いま？ 電車中・・・ああ、大丈夫。うん、それで・・・。そう。いいよ、いまから？ ん〜じゃあ・・・いまから行くけど、うん。そう、え、マジ？」

携帯が鳴るとともに通話を始める男。

これにも怒りが込み上げたが、彼は同様に深呼吸でそれを耐える。

車掌のアナウンスとともに、次の駅へ到着し、通話を続けたまま男は電車を降りる。ほっとしたのも束の間、ランドセル姿の子供たちがバタバタと乗ってきた。

奇声を発しながら車内を走り回る子供たち。車内は一気に騒然として・・・

ぎゃあー

母親の腕の中で幼子は火がついたように泣き出した。

彼は深呼吸を繰り返す。まだだ。まだ我慢しなければ・・・。

泣き叫ぶ子供の声と、おろおろと慌てながらあやす母親を傍目に、子供たちは車内を走り回り、女子高生たちは「超ウゼエ」「マジムカツク」などと連呼しながら母親を睨み付けている。

そんな中、平然とパソコン画面を黙々と眺めるサラリーマン。

彼は、怒りをこらえる。

限界に達するまで、彼は我慢をしなければならない。

怒りのあまり握った拳は震えている。顔は真っ赤で、こめかみには血管が浮いている。

それでも彼は耐えなければならない。

泣き止まない子供。

走り回り奇声を発する子供たち。  
完全に無視を決め込むサラリーマン。  
「ウザイ」を連呼する女子高生……

「次は」

お構いなしにさわやかな声でアナウンスをする車掌。  
ホームへ滑り込む電車。乗り込んだきたのは……

「ちょっと奥さん、ココあいてるわよ」

「ホラ、早くしないと……」

「大丈夫、ほら場所とったから」

「ありがとう助かるわあ」

どやどや乗り込んできた大荷物を抱えた中年女性の群れ。

「ちょっと、ここ、少しずれてくれませんか？」

「ホラ奥さん、ココ、ココ」

彼の怒りがピークに達した。

深呼吸とは違う、大きな息を肺いっぱい吸い込むと。

「いい加減にせんか、この馬鹿者っ！！！！」

電車の窓がビリビリと震えるほどの大音声で、彼は叫んだ。

## カミナリヤ

「おい、クソガキども。電車の中を走り回っちゃいかんと学校で習わなかったのかっ」

「おい、その馬鹿娘。口を開けばウザイのキモイの……それし

か言葉を知らんのか」

「そんなに仕事が大事か。仕事以外は興味がないのかダメサラリーマン」

「煩いババアども、荷物で場所取りをするのはたいがいにせえ」

彼は一気にまくし立てる。

あらぬ限りの罵詈雑言を、子供に、女子高生に、サラリーマンに、中年女性たちに向かって吐き続け。

ひとしきり不平不満をぶつけると、酸欠状態で、息も絶え絶えになつた。

肩で息をする。

\*

\*

\*

「いやゝ。今日も良かったですなあ」

「ええ、ほんとに。さすがに違いますね」

「うん、すつごく怖かった」

「おじいちゃん、かなりイケテルゝ」

「マジ イケテル感じ」

次の駅へ到着し、扉が開くと同時にスッキリとした笑顔で子供たちが、サラリーマンが、中年女性が、女子高生が降りていく。

「お疲れ様でした」

笑顔の車掌が、彼に向かってそう言う。

「今日もよかったですよ」

「そうか」

「はい」

車掌の言葉に彼は笑顔で席から立ち上がる。

「では、今日の分です」

「すまんのう」

「いえいえ」

車掌から茶封筒を受け取り、彼はそれを内ポケットに突っ込んで電車を降りる。

駅のホームかと思いきや、そこは駅によく似た……良く似せた店内。

「最近の方はねえ……ストレス溜めて本当はこう、誰かにぶつきたいのに、自分でやるといろいろ問題あるから……」  
車掌姿の男性が、ぼやくように彼に言う。

「まあ、だからこそ、こういう商売もできるのですがね」  
「……」

「じゃあ、明日もよろしく頼みますよ」

笑顔でそう言われて、彼は黙って頷き、店を後にする。

扉を閉めて、振り返る。

【雷親父のいる店 カミナリヤ】

扉にかかっている看板を見て、彼は溜息。

さて。

このストレスはどこで晴らせばいいのだろうか？

(後書き)

すみません。なんか即興で一気に書いた作品で…  
支離滅裂ですみません。

カミナリヤ

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1666c/>

---

カミナリヤ

2009年3月24日09時24分発行